

「新しい戒め」  
ヨハネ 13:33-38

【1】イエスの呼びかけ

ヨハネの福音書は 13 章から最後の晩餐の場面が描かれていく。主イエスは弟子たちに最後の教えを説かれた。そのイエスの心について 1 節には「彼らを最後まで愛された。」と記されている。使徒ヨハネはこのイエスのことばを御霊に導かれるままに大切に思い起こし、後の人々にしっかりと聞くべきことばとして記したのである。

イエスはこの時、ご自分の十字架を見つめながら、弟子たちにこれからの歩みについて語り始めた。主にとってこの十字架こそが栄光であったのである(13:31-32)。

このとき主は弟子たちに対して「子どもたちよ」(33)と呼びかけてくださった。彼らのことを愛し、いつくしみ、呼びかけてくださったのである。この呼びかけにイエスの心が表わされているのである。主は、私たち一人ひとりに対しても、「子どもたちよ」と親しく語りかけてくださるのである。

主イエスはこれからたった一人で十字架に向かわれるのである。そこには誰もついていくことはできない。ただ一人、神のひとり子のみが歩むことの出来る足取りだからである(33)。

【2】戒めの新しさ

いよいよ緊張していく時間の中で主は弟子たちに一つの戒めを与えられた(13:34-35)。その戒めは「新しい」と言われているが実のところ、この戒めはすでに旧約聖書の中にも語られてきたものであった(レビ記 19:18)。この戒めは古くからの普遍的な戒めである。では、イエスが語られた戒めのどこに

「新しさ」があるのだろうか。それは、「わたしがあなたがたを愛したように」という主イエスが示された愛に基づく愛である。

使徒パウロは「今や、律法とは関わりなく、…神の義が示されました。」(ローマ 3:21)と語った。キリストによって神は私たちに義とし、神の近くに招いてくださるのである。

このキリストの愛に裏打ちされて人は新しい生き方、新しい歩みへと導かれるのである。私たちが持ち合わせている愛情は脆いものかもしれない。しかし主は「互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」(35)とおっしゃってくださるのである。主はご自身の愛を知った者に期待してくださるのである。

【3】愛に生きる

私たちは自分の愛を語る前に、まず主の愛を学び知らなければならないのではないか。弟子のペテロはこのときまだ主の愛を完全には知らなかった。ペテロの関心はイエスではなく、あくまでも自分自身にあったのである。ペテロはイエスに対して「あなたのためなら、いのちも捨てます。」(37)と虚勢を張ったが、イエスはペテロの弱さをも知っておられたのである。

私たちは隣人に注目し、隣人を愛するように命じられているが、何よりもまずそこには主イエスの愛が私たちに注がれていることを忘れてはならない。

主イエスが私たちに愛してくださったこと、そして今も愛し続けておられることを心に刻みたい。この愛のゆえに、主イエスは十字架の道を歩まれたのである。